

『金雲翹伝』と翻案作『風俗金魚伝』に対する考察

—「佳人」の恋に見る受容と変容—

A study of *Tale of Junyunqiao* and the adaptation *Fuzoku Kingyoden*:
Acceptance and rewriting in the love story of “beautiful woman”

楊 文瑜

上海财经大学

要旨

1829年、中国の白話小説『金雲翹伝』は曲亭馬琴により『風俗金魚伝』に翻案された。全五巻からなる『風俗金魚伝』は馬琴における才子佳人小説翻案の代表作品といえる。漢籍と江戸文学の交流のピーク時期だけあって、二作の間には、どんな繋がりが存在しているのか尚不明な点が多々ある。

そこで、本稿では、受容美学の理論をふまえて、『風俗金魚伝』と『金雲翹伝』との比較を行い、恋の描かれ方の受容と変容に注目し検討を進める。変容の部分では、男女の恋より、仇討に関する内容ほうが多く書かれている。主君のために討ち入りして命を捨てるという復讐の物語『仮名手本忠臣蔵』の赤穂浪士の影響や日本人の仇討の感覚と深く関わっていると指摘したい。更に、比較検討を通じ、江戸幕府の要請と読者層、また作家馬琴の創作意図という受容の要因について考察を加える。『風俗金魚伝』は原典を受容した一方、その内実においては作者の勸善懲悪の思想とさまざまな日本的な要素が含まれていることを検証してみたい。

キーワード：『金雲翹伝』、『風俗金魚伝』、恋、受容、変容

『金雲翹伝』と翻案作『風俗金魚伝』に対する考察 —「佳人」の恋に見る受容と変容—

楊 文瑜
上海財経大学

1. はじめに

中日文化交流の長い歴史の中で、17世紀の中ごろから18世紀の末にかけて（明末と清の初めにあたる時期）起きた文化交流はもっとも注目に値するピークの一つだといえよう。それゆえ、そのころ、多量の新版の漢籍が次々と中国から日本に舶載されるようになった。特に、日本に舶載された白話小説が江戸の文学者の間で圧倒的な歓迎を受けた。文献記載によると、日本に将来され市井で流行していた白話小説を主とした文学作品は159種に達しているという¹。更に、将来された中国の小説は、翻訳や翻案・改作などの形で受容され、江戸文学の発展、特に読本に甚大な影響を与えている²と多くの研究者から指摘されている。

こうした背景の中で、1754年に、『商舶載来書目』に『金雲翹伝』の書名が記録されている。これはおそらく『金雲翹伝』が最初に日本に将来された記録であると指摘されている³。1763年（清乾隆28・日本宝暦13）、西田維則による『金雲翹伝』の和訳『通俗金翹伝』が印刷された。『通俗金翹伝』には二十葉の挿し絵が添えられているので、目録題に『繡像通俗金翹伝』とも書かれている。更に、馬琴により長編合巻『風俗金魚伝』に翻案された。第一編から第四編が1829年、第五編が1839年、それぞれ刊行された。

1812年、ベトナム（阮朝）の文人グエン・ズー（阮攸）が使節として赴いた清朝から帰国した後、『金雲翹伝』を翻案し、ベトナム独特の形式で長編韻文詩『翹伝』（書名は『金雲翹新伝』、『金雲翹』や『斷腸新聲』などさまざまである）を書き上げた。『翹伝』はベトナム文学の代表作となった。更に、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、日本語など世界各国語に翻訳され、「ベトナム文学の最高峰と考えられ、ベトナムの国民文学的作品とみなされている」。現在でも、貴重な文化遺産として守られている。また、『翹伝』は満洲語・朝鮮語にも翻訳された。朝鮮半島でも翻案作品が現れている。従って、翻案元となった『金雲翹伝』は、中国文学

¹ 厳紹盪（2000）《漢籍在日本的流布研究》江蘇古籍出版社，52-53

² 李樹果（1998）《日本読本小説与明清小説》天津人民出版社

³ 厳紹盪（2000）《漢籍在日本的流布研究》江蘇古籍出版社，52-53

『金雲翹伝』と翻案作『風俗金魚伝』に対する考察
—「佳人」の恋に見る受容と変容—

史にも名が出ない作品だが、その影響力は異国に伝わった白話小説の中では比べ物にならないほど大きいと言えよう。

『金雲翹伝』は二十回の章回体形式で書かれた中国文人により書かれた早期の白話小説である。作者については「青心才人 編述」と書かれているだけで、実名や年譜は未詳である。創作年代は明の末であると推定されている⁴。

董の考証によると、清の時代においては、『金雲翹伝』はベストセラーとして読み継がれていたそうである。清の康熙の時代、『金雲翹伝』の各修本や簡略本が次々と出されたことからみると、当時かなり人気を博していたに相違ない。そして、清の道光十四年に、また新しい刻本が刊行されていた。それぞれの版本は十種類以上に及んでいる。その影響力が弱くなったのは近代に入ってからである。中国の言文一致運動以後、この作品に関しては、中国小説史研究の第一人者魯迅や鄭振鐸からすらその批評は見当たらない。

1931年になってから、孫楷第が東京で中国の小説を調べたところ、初めて『金雲翹伝』の存在を「再発見」した。1932年に、孫楷第によって書かれた『日本東京所見小説書目』と『大連図書館所見小説書目』は、二十世紀の中国国内で初めて『金雲翹伝』を記載する文献である。もっとも、孫楷第の考証には、不十分と不適切などころもあると指摘されている⁵。

国内の先行研究では、董文成（1994）は『金雲翹伝』の版本考察において、主な研究成果を挙げた。また、『風俗金魚伝』と『金雲翹伝』との地名、人名の変化と内容の梗概を取り上げ、比較してみた。

日本では、ベトナム版の『金雲翹』の日本語訳は、英語とフランス語訳からの重訳を含め、五つの異なる翻訳版が出版されている⁶。『翹伝』の翻訳に伴い、『風俗金魚伝』との比較研究も行われてきた。近年では、山口健一（2013）⁷は『翹伝』と『風俗金魚伝』をめぐって構成と評価を比較した成果が見られる。

⁴ 董文成（1994）《清代文学論稿》春風文芸出版社、19

⁵ 董文成（1994）《清代文学論稿》春風文芸出版社、86

⁶ 阮攸（2005）『トゥイ・キョウの物語（斷腸新聲・傳翹）』（佐藤清二・黒田佳子訳）吉備人出版、232

⁷ 山口健一（2013）「阮攸（グエン・ズー）と馬琴——二つの作品をめぐって」『日本語・日本学研究』第3号

また、『風俗金魚伝』とほかの馬琴翻案作をめぐり、磯部祐子（2003）は主に現存する馬琴書簡を用いて、翻案の出版と成功の理由が、中国の才子佳人小説から「新趣向」を取り入れたからだを証明している。また、営利追求の前には、幾つもの才子佳人小説の出版断念を余儀なくされる状況が生じたことも指摘している。

筆者の調査では、国内外の研究成果は、ベトナムの翻案作『金雲翹』との比較研究に集中されている。また、中日二作の比較研究は主に粗筋や主題が中心的であることが分かった。実際、漢籍と江戸文学の交流のピーク時期だけあって、『風俗金魚伝』のテキストにおいては、具体的にどんな変容を遂げてきたのか尚不明な点が多々ある。そこで、原作の『金雲翹伝』と『風俗金魚伝』との相違を明らかにするために、実証的な比較研究が必要である。二作において描かれるヒロインの恋の話は物語全般に占める比重が大きい。更に、恋の巡り会いと深く関わっている三人の男性像もいまだ深く言及されていないのである。本稿では、上記のような状況を受け、恋をキーワードとして、『金雲翹伝』と『風俗金魚伝』を対象として、恋に関する内容の受容と変容の部分を中心に検討を進めたい。また、受容美学の理論をふまえて、両作品の相違、受容の過程における制約要素及びその文学効果について考察しようとする。

『挑発としての文学史』のなかで、文学作品受容における再生産の制約条件に対して次のように重要視されている。

文学の歴史は、美的な受容と生産の過程である。この過程は、文学的テキストが、受け入れる読者、反省する批評家、そして自分で再び生産していく作家の三者によって現代に活性化されることによって遂行されていく。⁸

実際、文学作品が異国で翻案される場合、このような美的な受容と生産の過程も同様に存在していると考えられる。したがって、日本における『金雲翹伝』の受容においても、受け入れる読者、反省する批評家、そして自分で再び生産していく作家の作用を改めて見直す必要があると考えられる。本稿は、この理論をテキスト分析の指針として日本で活性化された『金雲翹伝』の翻案作『風俗金魚伝』を考察してみたい。

本稿で取り上げている二つの作品の出処は以下の通りである。中国原典の『金雲翹伝』は春風文芸出版社によって出版された単行本（1983年）である。その基づいた

⁸ H・R・ヤウス（2001）『挑発としての文学史』（轡田収訳）岩波現代文庫、35

『金雲翹伝』と翻案作『風俗金魚伝』に対する考察
—「佳人」の恋に見る受容と変容—

版本は、大連図書館に所蔵されている清の順治の刻本（全二十回の繁本）である。馬琴の『風俗金魚伝』は1990年本邦書籍によって出版された『滝沢馬琴集II』第十四巻である。

2. 「佳人」の初恋をめぐって

才子佳人小説とは往々にして、恋愛至上主義の文学であると思われる。しかし、『金雲翹伝』と『風俗金魚伝』のテキストの分析を通じ、男女の恋を純粹に描くのが目的ではないことを指摘したい。まず、作品の中心人物から分析を試みる必要がある。『金雲翹伝』のヒロインは「佳人」の王翠翹である。「この女性像には作者の創作意図と深く関わっている」⁹と董文成（1994）は指摘している。『金雲翹伝』では、男性三人との出会いを軸に展開された翠翹の苦難を乗り越えた姿が描かれている。

2.1 才色兼備の「佳人」（王翠翹と船尾魚子の場合）

『風俗金魚伝』では、船尾魚子という「佳人」をヒロインとして、度重なる苦難に遭遇しながら、三人の男性との出会いの物語が展開されている。次に、両作品の「佳人」の恋の出会いについて、比較してみよう。まず、ヒロインの恋のめぐり逢いと結末を表で示すと以下ようになる。

	『金雲翹伝』のヒロイン： 王翠翹	『風俗金魚伝』のヒロイン： 船尾魚子
時代背景	中国の明朝嘉靖年間	日本の室町時代末期
奥庭での初恋	金重	庭井金重郎
郭での束の間の恋	束守	錫梨束太郎
恩義の恋物から 仇討ち物へ	徐海	下野太郎氏武
恋の結末	翠翹は金重と妹と三人で 暮らす	魚子は禪尼として草庵に 住む。 金重と妹は幸せに暮らす。

両作品の書き出しにおいて、時代背景と場所とも明確に示されている。『金雲翹伝』の時代背景は明朝嘉靖年間（十六世紀の中頃）、場所は北京と設定されている。

⁹ 董文成（1994）《清代文学論稿》春風文芸出版社、67

『風俗金魚伝』では、時代は日本の室町時代末期に改められている。そして、場所は摂津の国難波村に改変されている。時間と空間の転換により、物語も再創作できる環境が作り出されている。

原作の『金雲翹伝』では、ヒロインの父親は「員外」であり、富裕層あるいは中流階級の身分である。これは才子佳人小説でよく見られる家柄の設定パターンである。一方、『風俗金魚伝』の書き出しでは、ヒロインの家柄に対する紹介が原作より詳しく書かれている。内容も大きく異なってくる。

昔京都將軍家の。末の世の頃にやありけん。津の国難波村の片邊に。舟尾鱗蔵といふ。武士の浪人なりけり。父は関東にて。田畑千石餘り持てる郷士なりしに。乱れたる世のならいにて。敵の為に所領を奪取られ。遠く難波に漂泊にしたれども。其身一代は蓄のありければ。浪人を立通して。貧乏もあらず一期を過ぎしぬ。斯くて其子鱗蔵が代に至りては。貯蓄既に消滅て。始の如くにはあらねども。猶些少ばかりの資金ありければ。世渡のたつものがなとて。其を懐中にして。和泉の境に趣く程に。此頃異国より。始て金魚をもたらし来にけり。鱗蔵之を買取て。難波村に立帰り。生洲を造て養ひければ。年の春毎に其子多く殖て。金魚沢山いで来たり。此頃迄は世に珍しきものなれば。是を受て売り行商もの。あした毎に買ふと買ふほどに。思の儘になる善き商売を得て。富るにはあらねども。人並に世を渡けり。

(359 ページ)

『風俗金魚伝』の書き出しでは、ヒロインの家筋について多く語られている。祖父と父親はそれぞれ、郷士と武士の浪人という身分が新たに設定されている。また、武士の浪人から金魚商を営む商人に変わった経緯が紹介されている。ここの改変は浪人から行商へと生計を立てる江戸時代の商人の姿が見られている。話の舞台も登場人物の名前の変更だけではなく、ヒロインの生活背景と家柄についても改めて細かく設定されている。

また、「金魚」という言葉は作品の題名と関連している。原作の題名と同じように、ヒーローの「金重郎」とヒロインの「魚子」のそれぞれの名前の頭文字が題名の一部を表している。更に、「金魚」はまたヒロインの宿世と現世の運命とも深く関わっている言葉である。馬琴の翻案の過程において、こういう偶然性で読者に物語の奇異な効果をアピールする傾向が明確的だと指摘したい。

『金雲翹伝』と翻案作『風俗金魚伝』に対する考察
—「佳人」の恋に見る受容と変容—

『金雲翹伝』の「佳人」即ち王翠翹はほどほどの富と地位を持つ名士王家の長女である。良家に生まれた翠翹は美貌と才能を持っている。琴の演奏に秀でているだけでなく、文学や詩にも精通している。馬琴『風俗金魚伝』ではヒロインについての紹介は原作の「佳人」のイメージと類似している。

魚子と名稱たり。今年は十八歳に成りぬ。顔容態の麗しきは。京鎌倉にも類ある可もあらず。心情ばへさい優くて。且男にます才ありければ。走り書いと芽出度。歌を詠み文を綴り。筑紫琴の奥義を究めて。世に珍敷上手なり。(359 ページ)

ヒロインの魚子は才色兼備で、琴、和歌や文章も達者である。原作の中では、ヒロインが何度も詩に託して気持ちを表現したり、裁判沙汰の場で詩に救われたりするシーンが書かれている。詩作も琴の演奏も女性にとっては、教養のシンボルでもある。男性優位の社会では、ヒロインは美貌だけでなく、文学や音楽の才能も男性に持てる条件になっている。「佳人」は美しいばかりではなく、才知にもすぐれた「才女」である。「明の末から、理想の女性像を描くようになった」¹⁰と張が指摘しているように、こうした教養のある「佳人」のヒロインの登場は「低俗化から洗練された格調高い文学」¹¹への転換を現している。

女性は作品中の中心人物として書かれ、器量や才能においては男性より勝っている。また、ずっと行動力のある人間と思われる。このような設定は才子佳人小説のパターンである。『風俗金魚伝』の佳人像も中国の才子佳人小説としての性格にかかわっているのである。『風俗金魚伝』の中でも「美貌の才女」のイメージ設定を受け継いで、多くの場面で日本の読者の享受嗜好に対応されている。

2.2 奥庭における「佳人」の初恋（金重と庭井金重郎の場合）

前述の表で示している通り、ヒロインの恋のゆくえに焦点をあて、鮮やかな三つの「恋」の形が浮かび上がってくる。この三つの「恋」もそれぞれ三人の男性の登場によって、具象化されている。まず、金重と翠翹の恋と庭井金重郎と魚子の恋がある。

原作のヒーローの金重は裕福な家の出で、隣の村に住んでいる。知性的で才能、容貌や物腰は人並み以上の青年である。かねてから魅力的な姉妹の噂は金重の元にも届いている。清明節に、金重は翠翹、翠雲姉妹に出会い、すっかり魅了されている。

¹⁰ 張文珍 (2016) 《中国古代通俗小説発展研究》山東教育出版社, 156

¹¹ 前掲書, 156

そして、「もし姉妹を娶ることを得ずば、一生娶るまい」と金重は初めての出会いで、翠翹、翠雲姉妹を妻にしたいと心に誓う。変わって、『風俗金魚伝』ではこうなっている。

魚子は浪華一番なる。美人なりとは兼て聞しに。猶も優る処女なり。たまたま男と生れしかひに。斯る婦女を妻とせば。王公貴人の婿君に。なり昇るより楽しかりなん。(363 ページ)

『風俗金魚伝』では、ヒーロー金重郎が魚子だけを妻にしたいと改変されている。妹の乙女のことについては触れていない。改変が強く意図されていることが窺える。

その後、金重は翠翹と奥庭で再会を果たした。二人は愛を語り、将来を誓った。その日、金重は叔父の訃報を知らされ、遼陽に向かわなければならない。しかし、翠翹は続いた不幸に見舞われる。十五年間過ぎてから、科挙に及第し、任地に赴く金重が初めて再び登場する。

ヒーローの金重は物語の最初と終わりのところにだけ現れている。ヒーローとしての金重の描写では、度重なる流転を精一杯生き抜こうとする王翠翹の描写に比べ、及第し出世した金重についての内容は極めて少ない。

金重に相当する人物は『風俗金魚伝』では「庭井金重郎」と名付けられている。改変された名前には「庭井」という苗字は「佳人との出会いは庭で」という暗示も含まれている名付け方だと指摘できる。また、「庭と井」は庭の連想につながる。原作の「金重」の名前に近い金重郎の登場に関する紹介の言葉は極めて簡単である。

鰭二郎遥に見て。あれわ吾等が学問の。兄弟子なる。庭井金重郎に疑なし。彼人の宿所は。平野のこなたにあり。其家はいと豊富にて。吾々が類いにあらずと。(362 ページ)

ここでは、原作と違い、金重郎の才能、容貌についてはまったく書かれていない。ただ、裕福な家庭環境で、ヒロインの弟(鰭次郎)の先輩学友という点だけで原作と類似している。

男女二人の「身分が同じ」ということが江戸時代の結婚の基本である。馬琴は金重郎の登場の場面において明確に取捨選択している。金重とおなじく、金重郎の登場場面は少ない。金重郎に関する内容は次の通りである。

『金雲翹伝』と翻案作『風俗金魚伝』に対する考察
—「佳人」の恋に見る受容と変容—

庭井金重郎は寺詣での帰りに出会った船尾魚子に一目惚れした。金重郎はやがて船尾家の隣の空き家に移り住み、魚子と庭で再会を果たす。その後、恋に落ちた二人は愛を誓った。しかし、間もなく金重郎は叔父の見舞いに鎌倉へ行くことになる。その日、魚子の父は悪人に陥れられる。父を助けに身売りされた魚子は次々に不幸が降りかかる。一方、魚子と離れた後、金重郎は叔父と父親と死に別れる。魚子の身売りに際し家族に託した言葉に従い、金重郎は魚子の妹の乙魚と婚を結ぶ。その後、金重郎は武術が上達し、将軍の家臣となる。ある日、将軍家の命で来た金重郎は思いがけなくも庵に住む魚子と10年ぶりに再会する。しかし、魚子は鱒次郎に同居する提案を断り、禪尼となることに決める。その後、金重郎、鱒次郎の家も行く末までも栄える。

互いに恋に落ちた二人が愛を誓う場面の描写に関しては、馬琴はそのまま踏襲している。ヒロインが冷静な態度で、恋を求めながら、自ら結婚相手を決めると同時に自己の体を守る意向を明確に表している。女性として純潔を守らねばならない。軽はずみな愛ではなく、処女の純潔を保つことは自分の将来の幸せにつながるのだと、強く語られた。馬琴も幕府の要請に従い、国教とした朱子学を反映して、『金雲翹伝』の儒教倫理やモラルを行動に具現化した翠翹のような女性像を受け入れていたのである。

二人が愛の誓いをして間もなく、ヒーローの叔父の見舞いで、二人が離れ離れになってしまう設定も類似している。身売りに際し家族に託した言葉に従い、ヒーローはヒロインの妹と婚を結ぶ内容もほぼ同じである。変更されたのは進士に及第した金重は、任地に赴く途中再会したという内容である。

金重郎は武術を習い、達人の腕前になる。科挙が日本にはないので、武術のほうに替えたのも読者受容を考慮したものである。馬琴は勸善懲悪を主張する以外に、受容の過程における読者の享受性や売れ筋も重視していることが窺える。また、ヒーロー金重郎の武士としての活躍ぶりについての内容が原作より多く増やされている。

3. 廊における束の間の恋（束守と束太郎の場合）

3.1 束の間の恋について

物語の流れで、ストーリーの舞台は「奥庭」から「廊」に転換してきた。中国の明の時代、また馬琴の執筆している江戸時代、ともに庶民文化が花開いた時期である。一方、性も商品化されている社会でもある。特に、「廊」という空間においては、女性、恋愛はいかに見られ、語られているのか、興味深いものである。『金雲翹伝』と『風俗金魚伝』の受容においても、一つのサンプルになると確信している。

『金雲翹伝』では、翠翹は家を救うために廓に売られた。名前は馬翹に改められ、厳しい躰を受けて、名妓となった。ある日、商家の若旦那東守が接客を余儀なくされる馬翹に出会う。東守は馬翹に情を寄せ、妾として身請けを望む。東守は商売のため父親とともに臨淄に来ている。実際、故郷には嫉妬深い妻がいる。翠翹は東守が頼もしいとは思えない。青楼を出たい一心で思案した後、正妻とは離れて住いを構えることを条件に東守の妾になることに決めた。だが、翠翹は東守の父親に拒絶され訴えられる。即席で作った詩句を役人から高く評価されたので、翠翹鞭打ちを受ける罰も逃れる。だが、嫉妬深い正妻に知られた後、正妻の家に連れてこられ、虐待を受ける。後に、寺に身を寄せてもまた青楼に売り渡される。

『風俗金魚伝』では、東守は錫梨東太郎という名前に改変された。「錫梨」という苗字は、訓読みで漢字の「梨」は「無」と同じ「なし」と読めるので、原作のヒーロー東守の出身地である「無錫」に因んでいる。更に、「東太郎」の「東」は「つか」と読まれるので、魚子との恋は「つかの間の恋」という隠喩も重なっているので、意味深い名前の付け方の工夫が見られる。ここで、原作以上の効果が、翻案の中で成し遂げたユニークな例だと言えよう。

魚子も親を救うため、妾となる。また、騙されて遊女となる。名を楓葉と改められる。やがて御用商人錫梨東太郎に身請けされる。しかし、身請けしたあと、東太郎の父親に反対され領主に訴えられる。即席で気の利いた和歌と発句を読んだ楓葉（魚子）の才能に領主が感心して、楓葉（魚子）のような才女を不憫に思うようになる。ついに、領主の仲介により、楓葉（魚子）が父親の東作に認められる。しかし、嫉妬深い東太郎の妻に知られ、魚子は正妻の家に連れていかれる。楓葉は下女にされ、虐待を受ける。しばらくして魚子は、尼となった後また欺かれて遊女に売られた。

翠翹は幾多の苦難を通して、人間観察の目がより鋭くなってくる。馬翹を東守が訪れた場面では、東守との恋について、次のように理性的に思案している。

我与你逢場作戲，露水夫妻，可聚可散，你不十分深求我，我亦不十分厚責你。平平淡淡，尽有鏡花水月光景。難道你講要娶我，我倒講不嫁你？實是此事，退椿至難至重，不可輕易的。（97ページ）

あなた（東守）との恋は露のように儂いものである。互いに贅沢求めず、さっぱりした仲でいようよ。この恋はまるで鏡の中に映った花や水面に映っている月のような幻しである。慎重にすべきだと思っている。（筆者訳）

『金雲翹伝』と翻案作『風俗金魚伝』に対する考察
—「佳人」の恋に見る受容と変容—

また、翠翹は次のように冷静的に考えている。

从容等一等，無拘無束，敢作敢為豪杰，嫁了他，也有个出頭日子。這樣軟弱書生，怎做得事業來？（99 ページ）

東守が頼もしいとは思えない。何も大したことはできないだろう。むしろ英傑が現れるまでゆっくりと待とう。そうするとその人の嫁になってもらえば、幸せになれるだろう。（筆者訳）

引用文に描かれた翠翹の心理活動は『風俗金魚伝』では省略されている。東守は楓葉（魚子）を愛しながら、魚子を不幸から救い出す力や意志には欠ける弱弱しい男である。しっかりしている女性主人公と鮮明な対比になっている。実際、「弱い男」と「強い女」の設定は、明末から清初にかけての才子佳人小説に頻繁に出てくる。しかし、『風俗金魚伝』においては、東太郎については「弱い男」というマイナス的な描写がほとんど見られない。むしろ、プラスの面が多く描かれている。また、ヒロインが嫉妬深い正妻から虐待されるシーンに関し、『風俗金魚伝』では類似が見てとれる。激しい嫉妬に走る正妻への東太郎の対応も原作と同じように描かれている。

3.2 裁判の場面に見る「佳人」

ヒロインが身請けされたあと、男性側の父親に反対され役人（領主）に訴えられるエピソードにも受容が見られる。ここでは、ヒロインの女性の自由や幸せを求める姿勢が浮かびあがっている。

裁判沙汰の場面や妾になったヒロインに対する裁判の場面では、『風俗金魚伝』では原作より内容が簡略化されている。例えば、翠翹が役人に毅然と「寧可法下死，不願復入娼家（再び娼婦の家に戻るより法の下で死ぬほうがまだ）。」と言った言葉も削除されている。

また、即席で読んだ詩（和歌と発句）で自らの才能によって、裁判に勝ったヒロインの才女としてのイメージには、時代的に積極的な意味を以っている。『風俗金魚伝』では、中国の詩が和歌と発句に書き直されているゆえに、日本の読者にもその精彩さが伝わっている。ここでは、ヒロインが凛々しく、冷静且つ沈着な様子が描かれている。

そして、裁判の最後に役人が東守の父親に「做官的誰説有三妻兩妾，父子到此也須量情，翁婿怎么管得這樣事！（親は子の恋にいちいち口を出すことはない）」と親子の関係について諭すユニークなシーンも削除されている。

両作ともに父権の強い時代だっただけに、この部分の描写では、当時の結婚に対する家父長の影響力と干渉が顕著に現れている。同時に、自由な恋を求め、父権に対抗する若い恋人の姿勢も原作からそのまま受け継がれていると指摘できる。

総じていえば、「廓」おける恋には、儂く情緒的に捉えられているばかりでなく、もっと現実的で、実社会に即している内容も浮彫になった。裁判沙汰と嫉妬のプロットも馬琴の翻案の中に生かされている。両作の間には、父権と嫉妬深い正妻に干渉された束の間の恋においても、ヒロインの前向きに生きようとする描写がかなり類似しているところがある。この部分の恋愛模様では、女性中心的な視点と嫉妬の様子が多く受容されている。

4. 恋物語から仇討の話へ

4.1 恩義の恋の行方の比較（徐明山と下野太郎氏武の場合）

原作と比べてみると、この部分の改変がもっとも多いと分かってきた。特に、ヒロインの恋の相手である徐明山と下野太郎氏武の描写に変容が見られている。

春風文芸出版社によって出された『金雲翹伝』の出版説明には、「本書は王翠翹と徐海の物語を取り上げる」と書いてある。原作に登場する徐海と王翠翹は明の時代に実在の人物として記録されている。徐明山は倭寇の賊将であり、徐海とも呼ばれている¹²。『金雲翹伝』では、徐海と王翠翹の物語は次のように述べられている。

再び青楼に連れ戻された翠翹が人気者になる。そこへ、賊将徐海が訪ね、翠翹のことが気に入った。翠翹は正式な妾として徐海と一緒に生活を送る。また、翠翹は徐海の力を借りて、仇討・報恩を果たせる。後に、明の朝廷官吏胡宗憲のはたらきかけで、翠翹は徐海に朝廷に帰順することを勧める。ところで、胡宗憲の言葉に応じた徐海は不意をつかれ、戦死した。徐海の死に翠翹は悔んで泣きくずれる。やがて、土地の役人にまかせられた翠翹は銭塘江に身を投げる。

ここで、徐海を英雄のように取り上げられている。海賊としてのマイナスなイメージがすべて消えた。才子佳人小説の人物描写のパターン化が避けられている。徐海に対する佳人の敬意や情の素直さ、深さが脈々と読者に伝ってくる。

¹² 青心才人編次（1983）『金雲翹伝』春風文芸出版社、216

『金雲翹伝』と翻案作『風俗金魚伝』に対する考察
—「佳人」の恋に見る受容と変容—

原作と比較してみると、明らかに馬琴が下野太郎氏武の外見の描写を大きく改変したことが分かる。原作は徐明山の顔貌については、ほとんど触れていない。その代りに、『金雲翹伝』には、徐明山は闊達で金に執心せず心の広い豪傑、戦術にも長けた堂々とした英雄として讃えられている。つまり、徐明山の性格や全体の雰囲気、才能について、高く評価されている。史実に書かれた海賊のイメージとまったく違った捉え方である。心暖かな徐明山はヒロインには立派で頼もしい印象を与えているわけである。

これに対し、『風俗金魚伝』では、下野太郎氏武は賊将から判官の子に改変され、鎌倉をも手に入れた人物として描かれている。また、「色白く眉秀で鼻筋通りて美男子」と書かれている。「此人身丈高からで色白く眉秀で鼻筋通りて美男子なり年の齡三十許り未だ妻を娶らねば」。当時江戸時代の女性の好みの男性イメージに書き換えられている。しかも、「まだ独身である」と強調されている。原文の「徐明山は和尚である」という人物のイメージ設定とは大きく異なってくる。この改変は『挑発としての文学史』の中で論じられている受容の理論と一致している。

文学作品は、新刊であっても、情報の真空の中に絶対的に新しいものとして現れるのではなく、あらかじめその公衆を、広告や、公然非公然の信号や、なじみの指標、あるいは黙然の指示によって、きわめて確定した受容をする用意をさせている。¹³

「賊将」から「判官の子」への改変はつまり「なじみの指標」にすることだと理解できる。

徐明山は悲劇の英雄のように描かれている。徐明山と翠翹の死に別れの場面も情が深く感じられている。対して、魚子が氏武と死に別れのシーンは原作と異なって描かれている。

『風俗金魚伝』では、徐明山は下野太郎氏武に替えられている。下野太郎氏武に関する話は次のようになる。幾度の難を逃れた魚子はにまた欺かれてまた遊女にさせられる。その後、判官の子・下野太郎氏武に出会い、氏武の妻となった。氏武は戦功をあげ、鎌倉で魚子と共に平穏な日々を送る。氏武は魚子のために、魚子を苦しめた人達に懲罰を加える。その後、魚子は氏武に、朝廷との和睦を諫めたが聞き入れてもらえない。そして、氏武は間者を受け入れた原因で、夜襲を受けて戦死する。魚子は夫の敵を殺し、自分も入水した。

¹³ H・R・ヤウス (2001) 『挑発としての文学史』 (轡田収訳) 岩波現代文庫, 39

『風俗金魚伝』では、魚子は冷静に氏武の失敗の原因を分析した。氏武の不幸な原因は「おごり」であると書かれている。氏武が心傲りて只何となく酒宴に耽り遊興を専一にするのである。魚子が氏武に何度も忠告したが、聞き入れてもらえなかった。

二人の美女との遊興に耽り、金にも興味ある氏武は原作の徐明山のイメージ設定とは対照的である。ここの改変は、女色と金の欲望に左右される氏武のような人間の弱さを表していると考えられる。

氏武のイメージは『平家物語』の悲劇の英雄平清盛の姿とも重なるところが見られる。対して、原作では、翠翹は徐明山に対して和睦を勧めたことを後悔する意を述べている。悲劇の原因は翠翹が和睦を勧めたからであると言える。

『風俗金魚伝』では魚子の「氏武に寄り添う愛」が強調される一方、氏武の人間性の弱点についての描写に重点がおかれているのである。

4.2 仇討ちという設定

また、この部分の最後は魚子は夫の敵を殺してから入水する話と違って、原作はヒロインが夫の仇討することもなく、ただ入水する内容になっている。魚子は夫の仇を討ち果たしてから身を海に沈む内容が加筆されている。この部分には男女の恋より、仇討に関する内容のほうが多く書かれている。主君のために討ち入りして命を捨てるという復讐の物語『仮名手本忠臣蔵』の赤穂浪士の影響や日本人の仇討の感覚と深く関わっていると指摘したい。

世には男の多かるに。此の辯彌は辯舌を以て。我が夫の心を驕らせ。その歿首を取りて賞を得たる。我身の仇であるものを。何條此奴に従はんや。今此事の便宜を以て。辯彌を撃ちて夫の為に。恨みをかへして大海に。身を沈めん思案をしつつ。
(中略) 夫の仇と呼ばれば。驚き騒ぎて立たんとしたる。辯彌が首を打ち落して。身を跳しつつ水中へ。(489ページ)

大人同士の恋が色褪せている。自己犠牲の魚子の姿がクローズアップされている。夫のために、恨みを返す義理に生きる武家の娘としての行動が描かれている。武士の仇打ちと義理の世界が描き尽くされている。ここでは、恋の物語が仇打ちの物語に屈服する形に注目したい。

『金雲翹伝』と翻案作『風俗金魚伝』に対する考察
—「佳人」の恋に見る受容と変容—

以上の考察から見ると、『風俗金魚伝』には、「仇討ち物」や「心中物」といった読者の心に訴えかける複雑な男女のありようが盛り込まれていることが明らかになった。こうした変容は江戸時代に「仮名手本忠臣蔵」や「心中天網島」などが数多く生み出された背景と関連性を持っていると考えている。

5. 結論

本稿では、「佳人」の恋の受容と変容に着目することで、日本の近世における『金雲翹伝』の受容のあり方を考察した。分析で見えてきたように、『風俗金魚伝』では原作の恋のストーリーの構成と内容を再現しながら、人物や時空間の設定などにも改変や添加と削減も付け加えられている。「文学的生起的関連は、第一に、同時代及び後代の読者、批評家および作家がもつ文学的経験の期待の地平内で仲介される。」¹⁴という受容美学の理論と通じていることが証明できている。

恋愛譚においては、契りを結ぶ時に語ったヒロインの潔白を守ろうとする台詞が改変されたのも馬琴の創作意図を表している。それは、馬琴は幕府による教訓の要請を反映し、儒教倫理やモラルを行動に具現化した女性像を受け入れていることが分かった。対して、馬琴は貞潔忠孝のような儒教倫理のしめつけの内容を受け継いでいる。同時に、馬琴は自国の読者を引き付けるために意識してストーリーの変更などの工夫をしながら、因果応報の話に書き換えたと考えている。

円地文子は馬琴については、次のような言葉を述べている。「多読家の彼が万卷の書から読みとったものは、結局、仁義礼智忠信孝悌の表現するストイックな保守主義、権威主義であったのです。」¹⁵確かに、『金雲翹伝』を翻案する際にも、原作のエロチシズムを排除することより、むしろ原作の儒教倫理、封建社会の家父長制イデオロギーを維持する傾向の内容を摂取する馬琴の姿勢も鮮明に反映されている。

同時に、漢語や漢籍の引例が多いにも関わらず、原作の才子佳人のフォーマットの設定とプロットを柔軟に日本風に改変したことに工夫を凝らした。また、中国の詞や詩も日本の和歌や俳諧で柔軟に対応できるのも江戸の美学が馬琴の翻案の成功を支えていたと言わざるを得ない。恋愛譚から仇討ち物への変容は、職業作家として無味乾燥の教訓を避け、（ある程度の学力を持つ女性）読者を陶醉させる力にもなった。従って、原作と翻案の比較から馬琴が読み手を魅了するだけの創意工夫も浮かび上がってきた。

¹⁴ H・R・ヤウス（2001）『挑発としての文学史』（轡田収訳）岩波現代文庫、37

¹⁵ 円地文子（2013）『馬琴雑記』講談社文芸文庫（Kindle版）

更に、作者の生きた文化文政を中心とした時代に、商業の流通とともに、出版業も発達してきた。庶民文化が花開いた一方、性も商品化されている社会では、女性、恋愛はいかに見られ、捉えられているのか原作と『風俗金魚伝』の比較を通じて、ヒントになる点が明かになった。『金雲翹伝』にも他の白話小説と同様に、その時代の烙印が明らかに残っている。女性の恋の虚像の中に青心才人のような明朝の文人達の実社会に対する理想も込められているにちがいない。実際、明の時代では、社会に対する改造は道德の建て直しに託されていると多くの文人達が考えていた。

『風俗金魚伝』の翻案においても、忠、孝、節、義を女性の美德として読者の心に理解させ強い感銘を与えるための工夫が凝らされている。考察を通じ、馬琴は原作より緻密な描写でより完璧な女性像を創りあげようと添削を加えたりして、創作の余地を見出したりしていたことが分かった。更に、変容の部分では、男女の恋より、仇討に関する内容のほうが多く書かれている。主君のために討ち入りして命を捨てるという復讐の物語『仮名手本忠臣蔵』の赤穂浪士の影響や日本人の仇討の感覚と深く関わっていると指摘できる。ヤウスは文学の受容についてこう語っている。

文学的生起は、政治的生起とは異なり、それ自体で存立し続ける不可避な継起ではない。次にくる世代がどうしても避けられないものではないのである。作用を及ぼし続けることができるのは、後世の人々のもとで、なおも、あるいは再び受容される場合だけである。——つまり、読者がいて、過去の作品を新たに自分のものにするか、あるいは作家がそれを模倣するか、凌駕しようとするか、否定しようとするかしている場合である。¹⁶

ヤウスの受容美学理論の通り、『風俗金魚伝』が日本の人情風土に溶け合うようになり、日本人の読者の好みに合わせた翻案作に変容してきた『金雲翹伝』という作品は正に馬琴の想像力と創作力を駆り立てる源だと言えよう。これは、原典を素材に想像と創作を加えた翻案の良きサンプルだといえよう。

今日、女性の恋や幸せは前世からの因縁という因果応報の話も時代の波にのまれていった。文学を道德教化の担い手、女性の生きる姿と恋愛を道德倫理の見本とみては、文学の独立した審美意識が損なわれる。二作とも色褪せた昨日の作品にもかかわらず、『金雲翹伝』と日本における『風俗金魚伝』の受容の様子が近代東アジアの文学交流史においては、ベトナムにおける受容と同じく、確かな軌跡を残していると指摘したい。

¹⁶ H・R・ヤウス (2001) 『挑発としての文学史』 (轡田収訳) 岩波現代文庫, 37

『金雲翹伝』と翻案作『風俗金魚伝』に対する考察
—「佳人」の恋に見る受容と変容—

参考文献

- 前田愛（1973）『近代読者の成立』有精堂
円地文子監修（1977）『江戸期女性の生きかた』集英社
鈴木修二（1981）『中国文学と日本文学』東京書籍株式会社
中村幸彦編（1984）『通俗金翹伝』『近世白話小説翻訳集 第二巻』汲古書院
秋山虔 三好行雄編著（2019）『新日本文学史』文英堂
H・R・ヤウス（2001）『挑発としての文学史』（轡田収訳）岩波現代文庫
瀬地山角（2001）『東アジアの家父長制』勁草書房
磯部祐子（2003）「[中国才子佳人小説の影響—馬琴の場合—」、『高岡短期大学紀要』第18巻
徳田武（2004）『近世近代小説と中国白話文学』汲古書院
阮攸（2005）『トゥイ・キョウの物語（斷腸新聲・傳翹）』（佐藤清二・黒田佳子訳）吉備人出版
円地文子（2013）『馬琴雑記』講談社文芸文庫（Kindle版）
山口健一（2013）「阮攸（グエン・ズー）と馬琴——二つの作品をめぐって」『日本語・日本学
研究』第3号
青心才人編次（1983）《金雲翹伝》春風文芸出版社
董文成（2016）《清代文学論稿》春風文芸出版社
李樹果（1998）《日本読本小説与明清小説》天津人民出版社
嚴紹盪（2000）《漢籍在日本的流布研究》江蘇古籍出版社
張文珍（2016）《中国古代通俗小説發展研究》山東教育出版社